
カエル電車

44 (ドクロライダー)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カエル電車

【Nコード】

N36080

【作者名】

44（ドクロライダー）

【あらすじ】

ある日僕が電車に乗った時の話。

気付けば何故か周りの人間は頭の上に大きなカエルを乗せていた。

何だこいつら！？

バカじゃないの！？

僕は即座にそう思った。

それが普通のリアクションのはずだ。常識的なはずだ。

なのに、なんでこんなにも不安になるのだろうか？

だってこの電車の一車両という空間の中で、頭にカエルを乗せていないのは僕だけなのだ。

僕が正しい？

みんなが正しい？

常識？

何が常識？

マジョリティ……

マイノリティ……

日常の中に現れた微妙な非日常。

巻き込まれた僕は何に従えば良いのか？

（前書き）

<一作目>

シユールです。

でも、一応僕が作品に込めたメッセージ、意図みたいなものはちゃんとあります。

そんな短編です。

よろしく願います。

タタン タタン……
タタン タタン……

昔はよく電車の擬音語は『ガタンゴトン』と言ったものだが、最近の電車の擬音語は『タタンタタン』で間違いない。車内は静かで快適なもんだ。

まあ強いて言えば、
タタン タタン
タタン タタン
タタン……ガタン！

……とたまに大きな揺れが来るってのが最も正解に近いかな？

何気に学校へ行く時の電車に揺られながら音楽を聞く時間と言うのはお気に入りの時間だ。
僕の通学電車は通勤ラッシュのような混雑が起きないのが嬉しい。クラスの友人の坂本はこないだ電車でサラリーマンの揉め事に巻き込まれたと左頬を腫らしてきた。

ああ怖い怖い…。

とりあえず満員電車は怖いんだという教訓を忘れない為に授業中に消しゴムを輪ゴムの反動を使って飛ばして思いきり坂本の左頬に当てておいた。

あまりのダメージに鬼の加藤の『デス数学』の授業だと言うのを忘れて

「GYAAAAA!?!?!」

と飛び上がった坂本の雄姿は忘れない。

その後、シヨックで坂本はしばらく英語しか喋れなくなってたっけ。本当に満員電車は怖いなあ。

その点、僕の毎朝は平和そのもの…

だっただけなのだが。

今日の電車は一味違った。

目の前にカエルがいた。

いや、正確に言うと、

僕の目の前に立っているおばさんの頭の上にカエルが乗っているのだ。

おばさん（おそらく30〜40代だと思われる。ベージュの服に身を包んだ普通のおばさんだ）

の身長は僕より大分低いので、ちょうど頭の上に乗っているカエルが僕の顔の正面に来る感じになっている。

僕は電車に乗り込んだ瞬間からそのカエルに目が釘付けになった。

大きさから推測するに、牛蛙というやつだろうか？

とにかくデカイ。こんなのテレビでしか見た事がない。

東京に存在するサイズじゃない。

ど田舎の田んぼの畦道とかにいるサイズだ。

色は土色のイボイボした気味の悪いタイプのカエル。

昔よく捕まえた小さくて緑で可愛い雨蛙とは大違いだ。

クエエ。

ふいにカエルが鳴いた。

それで僕はハッと我に返る。

いやいやいやいや！！！！ ええ！？ 何で！？

あまりの事態にフリーズしていた脳みそが解凍を通り越してオーバーヒートし始める。

何これ！？ ファッション！？ 嘘だろおばさん！

一人テンパる僕をよそにおばさんはのんきに

「遅いわぁ。何でうちの駅は急行が止まらないのかねえ？」
とか言っている。

そう言えば、今どこだ！？

カエルに夢中で僕は駅を気にする事すら忘れていた。
乗り換える駅を過ぎていたらえらいことだ。

この電車には都心のように丁寧な車内の案内モニターはない。

だから一々停車駅で確認しなければならない。

そんな時丁度タイミングよく電車が止まった。

駅を確認。とりあえず乗り換え駅はまだまだ先だ。

よかった…。

どうやら僕はおばさんのカエルに夢中で二駅分ドアの真前で立ちすくんでいたらしい。

正直無理もないだろう。と僕は僕を正当化する。

頭の上に生きたカエルを乗せたおばさんなんて、16年に渡る人生の中でも始めて目の当たりにするレアものだ。

いやホントに驚いた。世の中には変な人もいるもんだ。

その時後ろから乗ってきた乗客とぶつかった。

「あっすいません！」

僕がドアをふさいでいた事に気付き、急いでドアの脇に寄り、角にもたれ掛かる。

そこで僕はさらにおつたまげる事になった。

結論から言つとこの車両には三人乗ってきた。

黒髪ロングが綺麗なお姉さん、

縦のラインが入ったスーツを来たサラリーマン、

そして金髪をツンツンにおつ立てたB系のヤンキーの三人である。

そのどれもが揃いも揃って頭にカエルを乗つけて乗車してきたのである。

思わず距離をとろうとしたが、すでに角に寄っているので動けない。

僕は夢を見てるのか？ 実は寝てんのか？

意味がわからなかった。

多少の色や大きさに違いはあれど、

カエルとしては巨大と言えるサイズの物を頭に乘せてみんな平然としている。

ってかそもそもカエルだぞ？ 女の人とか何で平気なんだ！？

金髪のヤンキーに至ってはせっかくツンツンに立てた髪型がカエルが乗ってる所だけぺしゃんこに潰れている。

みんな何で誰も騒がないんだ！？ 気付いてないのか！？

そんな事をわざとらしく考えながら僕は周囲を見渡した。

そう、あくまでも『わざとらしく』思考し、見渡した。
というのも、周囲を見ずとも僕はこの時点で何となく想像はついていたのだ。

やはりというか何とつか…この車両にいる人全員の頭の上にカエルが乗っかっていたのであった。

車両の人達はまさに老若男女、みんなそれぞれがマンガを読んだり、新聞よんだり、寝たり、隣の人としゃべったりしている。
ごく自然に。

まるでそれが当たり前であるかのように。

友達同士で乗ってる人も当然いるわけで、

例えば右前方の席に座っている女子高生二人なんてかなり会話が弾んでいて楽しそうだ。

しかしお互い頭上のカエルは気にも止めていない。

僕一人…

完全に僕一人だけであつた。

ここまで周りがナチュラルにそうしていると誰かにカエルについて尋ねる事も憚られる。

何より、目の前のおばさんのカエルがさつきからずっと僕を凝視していて動けない。

他のカエルはその場から動きはしないものの、
みんな思い思いの方向を向いてたまに小さく鳴いたりしているのに
こいつだけはじつと僕を見ている。

単に僕が目の前にいるからか？

それとも何か？

こいつは頭にカエルを乗っけていない人間がそんなに珍しいのか？

そもそも……何なんだよお前は？

気付いたら僕は衝動で目の前のカエルに手を伸ばしていた。

こいつを……

幸いおばさんはうつらうつらしているので僕の行動には気が付いていない。

頭から離したら……

自分に手を伸ばす人間をカエルは黙って見ている。

僕の目を真っ直ぐに射抜いている。

変な汗が吹き出るが手は止まらない。

一体どうなる！？

カエルの頭部にそつと手が触れる、

足つばマッサージ機のような意外に固く、弾力のあるイボイボの感触。

思いの他乾いている皮膚。

それらを手のひらに感じながらあと一息と力を込める。

グエエエ口！！！！

その瞬間おばさんのカエルが奇声を発して大口を開けた。

明らかに怒りの色をあらわにしているカエルに圧倒された僕は思わず「わっ」と叫んでから慌てて口をつぐんだ。

するとカエルには一切無関心であつた乗客が皆して僕の方を向いた。確かに大声をあげたのは僕だけどここまであからさまに反応が違つと釈然としないし……何より気味が悪い。とりあえずその視線に決まり悪さを覚え、思わず目を反らしたのだが……

どうにも様子がおかしい。

さつきまで皆それぞれにゲームしたりお喋りしたりしていた車内にそれまでの活気がなくなつていた。

代わりに小さく聞こえるヒソヒソ声、含み笑い。

それらに含まれる感情は嘲りであり、怒りであり、関心であり様々であるが、その全てが僕に対して向けられている事は目を伏せていてもわかつた。

車内が気付いたのだ。

自分達と異なる者の存在に。

何故か僕はすごく恥ずかしくなつた。

いや、どちらが本当におかしいのかはちゃんとわかっているつもりだ。

「あんたらバカか！？ 皆して頭にカエルなんか乗つけて恥ずかしくないの？」

つて言いたい！！

でも、何でだろう？

何でこんなに不安な気持ちになるんだろう？

もし今、手もとに帽子があれば急いでかぶっていたらう。

まるで恥ずかしい物を隠すように……。

そうして僕は揺らぐ自分の正しさに胸を張れずに、うつむいたまま電車に揺られ続けた。

タタン タタン…
タタン タタン…

どんなに早くこの場から離れたくても電車のリズムは一定だ。乗り換え駅までがこんなに遠いと感じた事はない。

そうして黙って電車に揺られる事しばらく……

次第に僕に飽きたのかヒソヒソ声あまり聞こえなくなり、先程までの車内の雰囲気に戻り始めた頃、ようやく乗り換える駅の二つ手前の駅に着いた。

あと二駅の辛抱だと安堵のため息をついた僕の後ろから苦しそうな声が聞こえた。

見ると、優先席に座っていたおばあちゃんが網棚に必死に手を伸ばしている。

おそらく次の駅で降りたいのだろう。

頭に乗っているカエルは人間本人と何かリンクするところがあるのだろうか？

おばあちゃんのカエルは見るからに年老いていた。

苦しそうなおばあちゃんを見て、僕は思わず網棚に手を伸ばしていた。

こんな僕みたいなアウトローな奴に手伝われても迷惑かも知れないけど……と、妙な弱気に捕らわれながらも荷物を降ろす。

荷物は時に重くもなく大きくもない普通のバックだった。電車は優先席とかでお年寄りへの労りを謳っているけど、網棚の異

様な高さはお年寄りに対してどうなんだろう。

そんな実際にJRに提出する予定のない抗議文を考えていると、おばあちゃんが僕に深々とお礼をしてきた。

「どうもありがとうね。お礼って程の物でもないけど、よかったらこれあげるから使ってね」

そう言っただけの中からは何か取りだそうとするので、慌てて遠慮しようとして「いえいえ!!」とか「そんな、大した事してないですから」とか色々口にするも、お年寄りというものは義理に頑固らしい。

「いいからいいから!! ねっ? これもらって頂戴な!!」

そう言っただけで強引に手渡されたのは……

カエルだった。

おばあちゃんの頭に乗っているカエルよりは随分若く、色も濃い茶色という若々しさに溢れたカエルであった。

僕が受け取った事に満足気な笑顔を見せ、おばあちゃんは今しがた開いたドアが閉まらぬ内にといそいそと降車して行った。

お礼? これが? 使う? 何に?

何か質問する間も色々ツツコム間もなかった。

僕は手元のカエルを見る。

片手で持つにはちょっと不安定なぐらいの大きさだ。

あまりに大人しくて、体が呼吸で上下していなかったら完全に人形と勘違いしてしまうだろう。

軽く頭を撫でるとケロロと心地よさそうに小さく鳴いた。

「……」

僕はなんの躊躇いもなくそいつを頭に乗せた。

表面のゴツゴツとは違う、両生類独特のヌルリとした感触と体格相応のズシリとした重さを感じる。

途端に味わう安堵感。

先程までの揺らいでいた自分の正しさなんかよりも遥かに堅固な自信、周囲の人間に裏付けされた常識。

この電車に乗ってから僕はようやく胸を張る事が出来たのであった。僕はミュージックプレーヤーの再生ボタンを押した。いつも通りのお気に入りの時間がようやく始まる。

その後、僕はいつも通り次の駅で乗り換え、

そこから約30分の時間を経て高校の最寄り駅に着いた。

終始気分がよかった。

みんなと同じという事への安堵というものがこれほどまでに心地よいとは思わなかったし、何より新しい常識、世界を知り、体現出来た事に自分の成長を感じていたのだ。

本当に良い気分。

頭のカエルを撫でてやりたかったが、そこは敢えてそうはしない。

まるでカエルが存在していないかのように、自然に過ごすのが通なのだろう。

あの車両の彼らがそうしていたように。

「うおっす!!」

ふいに肩を後ろから平手打ちされた。

音楽を聞きながらでもわかる、このウザったい感じは坂本に違いはない。

しかし今日は気分がいい。

まだうつすら青アザが残っている頬には攻撃しないでやろう。

そんな僕に坂本は開口一番こんな事を告げた。

「お前頭の上のそれなんだよ！？ よく恥ずかしくないな？」

夢から覚めた心地。

足元に張った薄い氷が割れたような感覚。

まるで授業中居眠りしていた奴が先生に頭を小突かれて起こされた時のような……この時の僕はまさにそんな感じだった。

僕は慌てて周囲を見回した。

気付けばみんな僕をチラチラと見ている。

今まで音楽を聞いてて聞こえなかったヒソヒソ声、含み笑いが聞こえてきた。

逃れたはずの嘲り、異端者に向ける視線にまた捕らわれていた。

「……っ！！」

僕は慌ててカエルを取り、坂本の顔面に押し付けた。

グエッ

と鳴いたのは坂本なのかカエルなのかはわからなかった。

僕は改めて周囲を見渡す。

不思議だ。

ここでは……

ここでは誰もカエルを頭に乗っけていないのだ。

僕は正しさと言っものがわからなくなった。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

読んでいて何となくおわかりになったかたもいらっしゃるかも知れませんが、僕はこういうシニールなのが大好きなのです。

僕が何をテーマに書きたかったかと言いますと、

あらずじにもちよこつと書いていますが、

『マジヨリティとマイノリティ』です。

結局のところ共同体の共通認識が常識とやらになるわけで……。

じゃあその共同体から外れてしまった時、人は何を判断基準にして生きていけばいいのか？

などなど。

案外常識って狭い認識ですよな。

みたいな。

まああれです。

そういうところまで伝えられるような作品を書ける人間に僕はなりたいです（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608o/>

カエル電車

2010年10月17日13時11分発行